

中間・期末テストやめました

日々の予習復習重視

本年度から川場中 詰め込み勉強防止

中間テスト、期末テストはやりません。川場村各地の川場中学校(利根川太郎校長、百二十三)は本年度から、定期テストを廃止した。定期テスト直前の詰め込み勉強だけに陥ることを防ぎ、日々の授業、予習復習を大切にする意識を持ってもらうためだ。定期テストの代わりに、各教科の単元ごとの「単元テスト」と、基本の定着をみる「総合テスト」を実施している。廃止から四カ月。父母から不安の音が聞かれる一方、「学習時間が増えた」「勉強のペースがつかめた」という生徒がおり、新しい試みの成果も見え始めている。

不安、成果の声

■こつこつ勉強
七月中旬に行われた川場中のP.T.A懇談会。「中間テスト、期末テストをやめたことにより、成績が下がった生徒はいません。学校側は自信を持って保護者に説明した。昨年度から通知表が絶対

評価に変わり、他人との比較ではなく、自身の学力が問われるようになった。同校は生徒に日々の授業に集中させ、習業に力をつけさせたいと考え、評価の対象を「定期テスト」から「日々の授業を反映したテスト」へ移行していく。

昨年秋から中間テストを廃止。本年度の一学期から期末テストもやめた。「テストのための勉強をやめて、本当の学びを追求してほしい」と思った。山岸信之教諭(左)は、定期テスト廃止に踏み切った理由をそう語る。

小学校と同様、実技四教科を含む単元テストを実施。細かい節目で定着を確認できるため、数学などの積み重ねが重要な科目で、つまづき生徒が少なくなったという。二年生の宮田友理子(左)は「こつこつ勉強

本年度から、中間テストと期末テストを廃止した川場中。真剣に授業に臨む生徒たち



するようになり、授業がよく分かるようになったと話す。

■夏休みに補習

各学期の終わりに国語、社会、数学、理科、英語の五教科で「総合テスト」を行い、基本的な内容の理解度をチェック。通知表評価の対象にせず、百点満点のうち七十点以下だった教科は長期休暇中に補習を受けて、弱点を補う仕組み。七月上旬に行われた初の総合テストで、生徒全体の九割近くが七十点を超えた。

補習対象者は少なく、自主的に補習に参加する生徒が多かった。三年生の宮田毅君は「受験もあるし、苦手な理科を勉強したい」と意欲的だ。三年生の教養補習は対象者四人に対し、十九人が自主参加した。

■生徒自身の変化

同校が六月に実施したP.T.Aアンケート。「普段から学習時間が少ないから心配」「通知表がくるまで成績が分からない」「入試で大丈夫なのか」など、親の不安が噴出した。二年生男子の母親(左)は「何となく不安。普通にやってもらった方が安心なんですけど」と打ち明ける。

三年生女子の母親(左)は当初不安を抱いたが、次第に勉強量が増え、テストの点数が上がっているのを見

る考えが変わった。「単元ごとの学習でペースをつかんだよ。定期テスト廃止のマイナスは感じない」と評価する。

学校側は学年通信や学校通信を発行し、学習の進み具合をこまめに報告するなど、保護者の不安を取り除くことに躍起だ。利根川校

長は「生徒たちが自分やる気を出すようになった」と、生徒自身の成長を実感している。